

目指す学校像	SSH指定校として「自主・自律・創造」の校訓のもと、自ら育んだ高い「志」を実現し、次代を担い国際社会をリードする人材を育成する。
--------	--

重点目標	1 SSH指定校としての取組を起点に、全校生徒の「志」を育み、一人ひとりの第一志望の進路を実現する。 2 自ら課題を発見し、解決する主体的な学習態度を育てるとともに、授業の質を向上させ、社会のリーダーとなる確かな学力を身に付けさせる。 3 北高生としての品格を高め、健全な心身と豊かな人間性を育む。 4 地域の理数教育拠点校として活動すると同時に、グローバルな研究活動を展開して国際社会へ開かれた学校に発展させる。
------	--

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

学校自己評価						学校関係者評価	
年度目標				年度評価		実施日令和5年2月8日	
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
1	<現状> ○今年度より、SSH 2期目に入る。2期目に新たに加わる事業と、6年間で行ってきた事業の融合を図り、これからの5年間の具体的な方向性と計画を考え実践していく。 ○今年度2回目となった大学入学共通テストは291名が受験し、274名が受験した。これは3年生の9割にあたる人数である。また、5教科受験者は92名で、昨年度から18名増えた。現役国立大学合格者は40名となり、そのうち34名が国立大学へ進学した。ここ数年は9割前後の受験者数が定着しており、大学一般受験の傾向が着実に浸透している。共通テストリサーチの結果がD判定やE判定でも、諦めずに志望を貫いて合格した生徒も複数名いた。 ○令和3年度からの新大学入試について、受験をはじめとした進路に関する情報量において、教職員間に差が見られる。 <課題> ○SSH 2期目の指定と、次期学習指導要領を踏まえた、本校の課題研究型授業の構築が大きな課題である。SSH推進部やカリキュラム委員会はもとより、全職員一丸となった対応が必要である。研究指定となる「さいたまSTEAMS教育」も積極的に推進する。 ○全教職員が情報を共有できる環境を作り新入試の準備を行い、担任・副担任が生徒・保護者へ正確な情報提供を行えるように協力する。 ○国立大学を選ぶ視野を全国に広げさせ、募集枠が増えている学校推薦型や特別選抜型からチャレンジさせ、合格のチャンスを拡大させたい。	SSH校としての取り組み	① 6年間の取り組みを客観的に評価し、新規事業の実践で、SSH行事・課題研究などが生徒及び教員にどのような変容をもたらすことができたのかを評価していく。 ② 指定2期目のスタートにあたり、学校全体のコンセンサスをとり、具体的な目標と方向性を整理し学校全体で共有できる環境を構築する。	① 過去6年間に行われてきた様々な評価を分析、さらに、他校SSH校の研究を行い、SSH事業の取り組みについて総括する。得られた結果を元に新規事業開拓ができたか。 ② 本校のSSHの取り組みはSTEAMS Timeおよび課題研究を中心に多くの教員から協力をいただくことができてきたか。	① 年度当初に具体的な計画を立て事業終了後にアンケート等を行う取り組みができた。また、他校への視察を複数名の教員が実施することによりSTEAMS Time Iの内容の充実と役立てることができたか。 ② STEAMS Time Iの担当者間のコンセンサスを取り実施することはできたが、教員全体の理解までには至っていない。課題研究ガイドブック作成はできなかったか。	B	・SSHの取り組みの基盤を作るための具体的な方策および活動内容を策定し実行していく。 ・STEAMS Time IIに向けて具体的な方策と課題研究ガイドブック作成を早急に行っている。
	○令和3年度からの新大学入試について、受験をはじめとした進路に関する情報量において、教職員間に差が見られる。 <課題> ○SSH 2期目の指定と、次期学習指導要領を踏まえた、本校の課題研究型授業の構築が大きな課題である。SSH推進部やカリキュラム委員会はもとより、全職員一丸となった対応が必要である。研究指定となる「さいたまSTEAMS教育」も積極的に推進する。 ○全教職員が情報を共有できる環境を作り新入試の準備を行い、担任・副担任が生徒・保護者へ正確な情報提供を行えるように協力する。 ○国立大学を選ぶ視野を全国に広げさせ、募集枠が増えている学校推薦型や特別選抜型からチャレンジさせ、合格のチャンスを拡大させたい。	高い「志」の育成と進路実現	① 生徒の「志」を高めるため、各学年・教科・進路指導部による組織的・計画的なキャリア教育を実施する。 ② 学年団と協力して、保護者に対しても進路情報を発信する。 ③ 卒業後の具体的な進路目標を早期に意識づけるため、進路希望調査及び個人面談を実施し、その内容を学年・進路指導部で共有して指導する。 ④ 自主学習を習慣化し、効果的な時間管理意識を高めるため、定期的に学習状況調査を行う。 ⑤ C l a s s i ・スタディサプリ・模試復習サイトの活用を推進する。 ⑥ 補講(長期休業・後期)の積極的な参加を呼びかける。映像講座などの活用も促す。	① LHRや総合的な探求の時間等を利用して、学年に応じた進路行事を実施できたか。 ② 保護者に対して進路情報を提供できたか。 ③ 進路希望調査と、個人面談が実施できたか。生徒の進路動向を学年・進路で共有できたか。 ④ 自主学習時間を縮小せずに維持できているか。 ⑤ スタディサプリを視聴できているか。また、朝学習・宿題配信などでの活用ができたか。 ⑥ 年間20講座以上の進路補習を開講できたか。	① 状況に応じて実施時期の変更が多少あったが、ほぼ計画通り実施できた。 ② 学年毎の保護者会や三者面談を通じて行った。 ③ 学期毎に調査を行い、生徒の動向把握に努めた。また、各担任が丁寧に個人面談を行った。 ④ 概ね維持した。 ⑤ 今年度は3年生に加え、1年生がよく活用した。 ⑥ 夏季休業中を中心に、進路補習を実施した。	A	・来年度1年生は2学期までに、進路の志望を学部・学科も見通して考えさせる。進路研究の時間を確保したい。 ・数多くの高大接続事業が行われるようになり、理系のプロジェクトはSSH推進部から発信されるものもある。これらに生徒が積極的に参加しようとする意欲をどのように喚起するか。また、進路指導部内での担当を明確にする。
2	<現状> ○授業でのiPad活用や、学習支援ソフト、テレビ会議アプリなどを使ったICT教育・オンライン授業、アクティブラーニングの推進がさらに求められる。 ○1年生の「STEAMS TIME」、2年生「数理探究」における課題研究の内容の充実が求められる。特に教科横断型の「STEAMS TIME」について、効果的な授業展開が求められる。 ○観点別評価の導入にともない、各教科における評価規準のたて方、保護者や生徒への周知の方法についても検討し、指導と評価の一体化を目指す。 ○入学者選抜においてさらに倍率を高めるべく募集業務の検証、改善をすすめていく。 <課題> ○海外との交流事業の変更改善を検証し、学校全体の取り組みとして位置付けていく。 ○各分担当業務の内容、進め方について検証し、1業務複数体制の徹底を継続する。 ○担当者の入れ替わりを考慮し、業務の引き継ぎを含め、さらなる効率化を図る。	生徒の学力向上に向けて全校で取り組む、ICTの強みを生かした授業力向上	① 「STEAMS TIME」において、生徒が主体的に学習課題を見つけ、論理的思考を身につけ、課題解決力を身につけられるよう授業を展開する。 ② ICT機器をフル活用し、授業支援サービスやテレビ会議アプリを利用した教育実践を順調に進め、アクティブラーニングの実践を促進し、効果的な新しい授業・指導法の方策を研究する。 ③ 観点別評価における評価規準のたて方、保護者や生徒への周知の方法等について校内に周知を図る。 ④ 授業アンケートを実施し、授業改善に役立てる。 ⑤ 中学校・塾とできる限り連携し、きめ細かな情報交換を行う。 ⑥ 学校説明会を充実させ、理解を深めてもらう。 ⑦ 学校案内やHPでの情報発信の方法を改善し、積極的に広報活動を行う。 ⑧ 海外派遣事業、留学生受け入れを実施する際に充実したものになるよう、これまでの課題を踏まえて検討する。 ⑨ 効率的な取り組みを検討し、実施する。 ⑩ 業務を複数で取り組むように努める。特に次年度に引き継げるよう、担当で業務の進め方の工夫を図る	① 「STEAMS TIME」「数理探究」の課題研究において、科目の目標に沿って生徒が主体的に学び、課題解決能力を身につけ、充実した発表ができたか。 ② 授業支援ソフトやテレビ会議アプリを使い、新しい形の教育を効果的に提供できたか。 ③ 指導と評価の一体化が実現できたか。 ④ アンケートが実施され、授業改善に役立てられたか。 ⑤ 具体的な方策を実行できたか。 ⑥ 学校説明会等参加者数を多く確保し、満足してもらった内容で行えたか。 ⑦ H P等を通じ、中学校・塾に適切に情報を提供することができたか。 ⑧ 今年度も予約開始から数分で定員に達するなど、高い関心を維持することができた。参加者アンケートの結果も良好であった。 ⑨ 学校選択問題導入2年目となったが、多くの志願者を確保することができた。 ⑩ 留学生を3名(イタリア、台湾)受け入れ、留学生に満足感や達成感を感じてもらったことができ、本校生徒にも刺激となり、よい影響があった。 ⑪ 時間割編成、変更業務を協力体制のもと効率化を行うことができた。文書を適切に保存、管理することができた。 ⑫ 1業務複数体制で実施することができた。	① 「STEAMS TIME」内の探究活動において、担当者の指導のもと、共同作業が円滑に行われ、充実した発表ができた。 ② 授業支援ソフトやテレビ会議アプリを使い、これまで蓄積したノウハウのもと、授業のみならず行事等にも活用することができた。 ③ 各教科・科目でルーブリックを作成し、それに則り適切な指導と評価の一体化が実現できた。 ④ 個々にアンケートを実施し、授業改善に役立てることができた。 ⑤ H P等を通じ、中学校・塾に適切に情報を提供することができた。 ⑥ 今年度も予約開始から数分で定員に達するなど、高い関心を維持することができた。参加者アンケートの結果も良好であった。 ⑦ 学校選択問題導入2年目となったが、多くの志願者を確保することができた。 ⑧ 留学生を3名(イタリア、台湾)受け入れ、留学生に満足感や達成感を感じてもらったことができ、本校生徒にも刺激となり、よい影響があった。 ⑨ 時間割編成、変更業務を協力体制のもと効率化を行うことができた。文書を適切に保存、管理することができた。 ⑩ 1業務複数体制で実施することができた。	B	・全生徒が持つiPadや、授業内での学習支援ソフト、テレビ会議アプリなどの活用をさらに進め、ICT教育、課題解決型学習の手法をさらに深めていく。 ・各教科で指導法や評価法の研究がさらに求められる。 ・観点別評価規準のたて方、ルーブリックの作成や評価方法などをさらに研究していく。 ・入学者選抜募集業務の検証を行い改善をすすめる。 ・海外交流事業を具体化し、学校全体の取り組みとして位置付けていく。 ・各分担当業務の内容、進め方について検証し、1業務複数体制の徹底を継続する。 ・担当者の入れ替わりを考慮し、業務の引き継ぎを含め、さらなる効率化を図る。
	<現状> ○「自主」「自律」の校訓のもと多くの生徒は落ち着いた高校生活を送っている。 ○自転車通学、交通機関利用通学ともに多くの生徒は安全に登下校をしている。 ○教育相談の件数が、年々増加しているためカウンセラーと相談しやすい環境作り <課題> ○生徒自ら学校生活の中で主体的に判断し行動できるような活動を促進する。 ○年々減少している事故件数がゼロになるよう職員、生徒へ喚起を促す。 ○規則正しい生活習慣を確立し、自己管理・安全意識を向上させる。 ○早期に相談に来られるような体制づくりを進めていく。	安心、安全な高校生活	① 生徒自ら安心安全な高校生活が送れる環境作りを風紀委員が中心となって行う。 ② 登下校マナーアップ・駐輪マナーアップ・挨拶運動を風紀委員会が行う。 ③ 委員会活動を教職員がサポートする体制を整える。 ④ 携帯・インターネット安全教室を年度当初に実施し、年間を通じて生徒の意識向上を図る。	① 風紀委員、教職員による各活動が1年間を通して行われたか。 ② 登下校、駐輪、挨拶のマナーアップが図れたか。 ③ 教職員がしっかりサポートできたか。 ④ 携帯・インターネット安全教室を実施し十分な指導ができたか。	・風紀委員による駐輪点検など各種活動を年間を通じて行い、教職員もサポートすることが出来た。自転車事故報告書の提出が迅速になった。 ・携帯・インターネット安全教室等の行事を予定通り実施、また関連する項目について生徒に配信し意識向上を図るための指導が出来た。	B	・外部からの苦情はやや減少してきているが、主体的に判断し行動出来るよう、さらなる取り組みが必要である。(授業中や登下校時) ・事故件数自体を減らす取り組みが必要である。(ヘルメットの着用奨励等)
3	<現状> ○先の見えない新型コロナウイルス感染症環境下において、with コロナに対応した取り組みの開発をおこない生徒に提供していく。 ○特にグローバルプログラムやSSHサイエンスフィールドワークを重点に実行していく。 <課題> ○地域の理数教育拠点校として、本校の「STEAMS TIME」の取り組みを、アウトリーチ活動を通じて、市内の小中学校に伝えていく。 ○また、小中学生のサイエンスに対する興味関心を高めていくと同時に「さいたまSTEAMS教育」の核となる生徒の育成を図る取り組みを実践していく。	SSH校としてのグローバルサイエンスリーダーの育成	① 生徒の想像力、探究力および発表能力を育成するために行われるSTEAMS TIME、サイエンスに対する興味関心を高めることを目的に実施されてきたサイエンスフィールドワークなどをコロナ禍で実施する具体的な計画を作成する。 ② コロナ禍でもオンラインだけでなく現地を訪れるグローバルプログラムやサイエンスフィールドワークを実施し、双方向かつ継続的な活動を行う環境をつくる。	① 第1期で行われてきた内容から発展した行事に対し、新しい状況に対応するための計画実施することができたか。また、行われた行事に対して生徒はどのような評価を行ったかを検証する。 ② グローバルプログラム・サイエンスフィールドワークの内容の充実を図ることができたか。参加者アンケートの結果より評価する。	① SSHサイエンスフィールドワークに関しては、臨海FWが目盛りとなったがその他は計画通り実施できた。新規事業として天体観測FWを開発した。 ② 新規にハワイサイエンス研修を実施することができた。パシフィックムプログラムを複数回行うなど、withコロナの環境の中効果的な取組を実施した。	A	・SSHフィールドワークやグローバルに関する取り組みの評価の検証を行い、他の活動と関連させ、より効果的な実施になるような研究開発を行う。
	<現状> ○先の見えない新型コロナウイルス感染症環境下において、with コロナに対応した取り組みの開発をおこない生徒に提供していく。 ○特にグローバルプログラムやSSHサイエンスフィールドワークを重点に実行していく。 <課題> ○地域の理数教育拠点校として、本校の「STEAMS TIME」の取り組みを、アウトリーチ活動を通じて、市内の小中学校に伝えていく。 ○また、小中学生のサイエンスに対する興味関心を高めていくと同時に「さいたまSTEAMS教育」の核となる生徒の育成を図る取り組みを実践していく。	SSH校としての地域の理数教育拠点校としての取り組み	① コロナ禍でも「自由研究サポートプログラム」、「ASEP Jr Hi」の内容をさらに充実させるため、準備段階をさらに充実させ参加者の満足度を上げていく。 ② 「STEAMS TIME」の実践を通して、地域の理数教育拠点校として市内の小中学校との連携を深め、情報の発信や新規事業を展開していく。	① 地域の小学生および中学生に対してサイエンスに対する興味関心を高めるためのイベントなどを企画実行することができたか。 ② コロナ禍でも「STEAMS TIME」を計画通り実施し、市内の小中学校との連携を深め、情報の発信や新規事業を展開することができたか。	① 理数科1年生による「自由研究サポートプログラム」に加え、FW参加者がTAとなって実施する「小学生サイエンス教室」を複数分野で開催することができた。「ASEP Jr Hi」はコロナ前の実施形態で開催することができた。30名を超える応募を頂くなど関心の高まりが見受けられた。 ② 「STEAMS TIME 教員交流会」としてファシリテーター養成講座を開催し、さいたま市の小中学校の先生方に情報の発信を行い、今後の協力体制を築いた。	A	・地域の拠点校として、小中学生だけでなく、教職員を対象とした事業を行う。それにより「さいたまSTEAMS教育」の基盤を作るための具体的な方策および活動内容を策定する。
4	<現状> ○先の見えない新型コロナウイルス感染症環境下において、with コロナに対応した取り組みの開発をおこない生徒に提供していく。 ○特にグローバルプログラムやSSHサイエンスフィールドワークを重点に実行していく。 <課題> ○地域の理数教育拠点校として、本校の「STEAMS TIME」の取り組みを、アウトリーチ活動を通じて、市内の小中学校に伝えていく。 ○また、小中学生のサイエンスに対する興味関心を高めていくと同時に「さいたまSTEAMS教育」の核となる生徒の育成を図る取り組みを実践していく。	SSH校としてのグローバルサイエンスリーダーの育成	① 生徒の想像力、探究力および発表能力を育成するために行われるSTEAMS TIME、サイエンスに対する興味関心を高めることを目的に実施されてきたサイエンスフィールドワークなどをコロナ禍で実施する具体的な計画を作成する。 ② コロナ禍でもオンラインだけでなく現地を訪れるグローバルプログラムやサイエンスフィールドワークを実施し、双方向かつ継続的な活動を行う環境をつくる。	① 第1期で行われてきた内容から発展した行事に対し、新しい状況に対応するための計画実施することができたか。また、行われた行事に対して生徒はどのような評価を行ったかを検証する。 ② グローバルプログラム・サイエンスフィールドワークの内容の充実を図ることができたか。参加者アンケートの結果より評価する。	① SSHサイエンスフィールドワークに関しては、臨海FWが目盛りとなったがその他は計画通り実施できた。新規事業として天体観測FWを開発した。 ② 新規にハワイサイエンス研修を実施することができた。パシフィックムプログラムを複数回行うなど、withコロナの環境の中効果的な取組を実施した。	A	・SSHフィールドワークやグローバルに関する取り組みの評価の検証を行い、他の活動と関連させ、より効果的な実施になるような研究開発を行う。
	<現状> ○先の見えない新型コロナウイルス感染症環境下において、with コロナに対応した取り組みの開発をおこない生徒に提供していく。 ○特にグローバルプログラムやSSHサイエンスフィールドワークを重点に実行していく。 <課題> ○地域の理数教育拠点校として、本校の「STEAMS TIME」の取り組みを、アウトリーチ活動を通じて、市内の小中学校に伝えていく。 ○また、小中学生のサイエンスに対する興味関心を高めていくと同時に「さいたまSTEAMS教育」の核となる生徒の育成を図る取り組みを実践していく。	SSH校としての地域の理数教育拠点校としての取り組み	① コロナ禍でも「自由研究サポートプログラム」、「ASEP Jr Hi」の内容をさらに充実させるため、準備段階をさらに充実させ参加者の満足度を上げていく。 ② 「STEAMS TIME」の実践を通して、地域の理数教育拠点校として市内の小中学校との連携を深め、情報の発信や新規事業を展開していく。	① 地域の小学生および中学生に対してサイエンスに対する興味関心を高めるためのイベントなどを企画実行することができたか。 ② コロナ禍でも「STEAMS TIME」を計画通り実施し、市内の小中学校との連携を深め、情報の発信や新規事業を展開することができたか。	① 理数科1年生による「自由研究サポートプログラム」に加え、FW参加者がTAとなって実施する「小学生サイエンス教室」を複数分野で開催することができた。「ASEP Jr Hi」はコロナ前の実施形態で開催することができた。30名を超える応募を頂くなど関心の高まりが見受けられた。 ② 「STEAMS TIME 教員交流会」としてファシリテーター養成講座を開催し、さいたま市の小中学校の先生方に情報の発信を行い、今後の協力体制を築いた。	A	・地域の拠点校として、小中学生だけでなく、教職員を対象とした事業を行う。それにより「さいたまSTEAMS教育」の基盤を作るための具体的な方策および活動内容を策定する。

学校関係者評価	実施日令和5年2月8日 学校関係者からの意見・要望・評価等 ・第二期のSSHをさらに充実させて欲しい。 ・今年度の高1(新課程)をSSHプログラムでいかに伸ばせるか注目している。 ・さいたまSTEAMSで先生方の協力体制ができるといい。 ・理数系ではない先生、生徒の関りを大切にしたい。 ・地域の小中高の核となつて、引っ張って行ってほしい。 ・地域への情報発信をさらにお願したい。
---------	---